参与観察法によるパリの移民と社会的混合に関する研究

Participant observation on the influence of immigration and mixité sociale on formation of people's bond or community in Paris

三宅正弘　武庫川女子大学　准教授

Masahiro Miyake　Associate Professor, Mukogawa Women's University

概要

フランス革命の理念である「自由・平等・兄弟愛」は，今日，我々がフランスで移民として暮らす場合の住みやすさにも，少なからず影響を与えているものと考えられる。本研究調査を通して，「フランス人とは困っている人を探し，手をさしのべる人たち」と考えるようになったことに，出身地の多様性が関係してきたように思われ，その多様性の実態を本論ではパリ市および郊外を例に明らかにしていきたい。移民が必ずしもかたまっているわけではない側面を示し，社会的混合が，生活空間（街角）や居住者用店舗の機能や景観に与える影響を考察したい。移民に関して参与観察法による生活空間レベルでの実態やパリ郊外（バンリュー）の研究は少ない。本論では二点の考察を行う。一つはパリ北部の五差路地点の街区における移民と店舗特性との関係を明らかにし，次にパリ市と郊外における特性と比較している。偶然にも調査時期中に前者の五差路の角に対面した立地する二つの店でそれぞれ働く男女が主人公となった映画 Le Passé がカンヌ国際映画祭主演女優賞を受賞した。三人の主人公はアルゼンチン出身者，イラン出身者，アルジェリア移民二世，がつとめた。舞台となったこの街区は，こうした特性を実際にもち，パリの社会を象徴しているとも考えられる。

Summary

My research theme is the influence of immigration and mixité sociale on formation of people's bond or community and townscape in Paris. That's where so many people immigrated into the country. There are so many different races and cultures, living together in same district. There is a lot of Jewish influence and northern Africa influence in some townscape. Such district has a lot of other cultural influences. So that must be having a positive effect on more and more people's attitudes. People are so mix-conscious in these districts.

1. 参与観察法

参与観察の地点としたのは，ナポレオン三世時代のオスマン知事による都市計画において設計された街路に立地し，かつ同時代に形成されたオスマン式建築による住居と街区とした（図1）。パリの典型的景観とされる居住形態の一つである。パリ市内北部のその二階（フランス式）に 365 日間，家族で居住することで，地域行事等にも参加しながらこのオスマン式建築の居住者や，街区の全店舗に取材をした。店舗は生活利用を継続しながらインタビューを行った。この建築居住者の出身地調査では多数がフランス出身者であったが，同じ階の隣人は旧ユーゴスラビア，上階はイラン，下階はカメルーンであった。このような建築内 5 家庭や街区内居住者や店主（店員），近隣居住者を一年間で数十名，自宅で料理を共に囲むことで取材を行い，逆にフランスの習慣である招き返すということが相俟って多数の家庭を観察していった（本論では移民と社会的混合を論ずるが，この食事と料理に関する空間論は美食空間学として同号教育・研究誌の別稿で述べている）。

本研究調査は，2013 年 4 月 1 日から 2014 年 3 月 31 日までの 365 日間であり，当該街区を中心としたが，他方でパリ市内全域および郊外については居住者用店舗の典型の一つとされるブランジェリー・パティスリー（製パン店兼菓子店）を生活のなかで利用し，一日一店ずつ，365 店について，同一種品を購入するという同一方法でその経営者と移民との関係の調査を行った。図 2 は 4 月から 11 月の 8 か月間において会話式ヒアリングを行った店舗であり，パリ 1 区から 20 区とともに，特に東北部のセーヌ・サン・ド二県を着目している（図 2）。店主の出身地を利用者としての会話のなかで聞き取っていった。この小稿では，本調査の一部を示し，図 3 にはその店舗特性を明らかにしている。

図1　調査拠点街区

キーワード：移民　社会的混合　ブーランジェリー　カフェ　景観　セーヌ・サン・ドニ

Received 7 August 2014, Accepted 25 August 2014

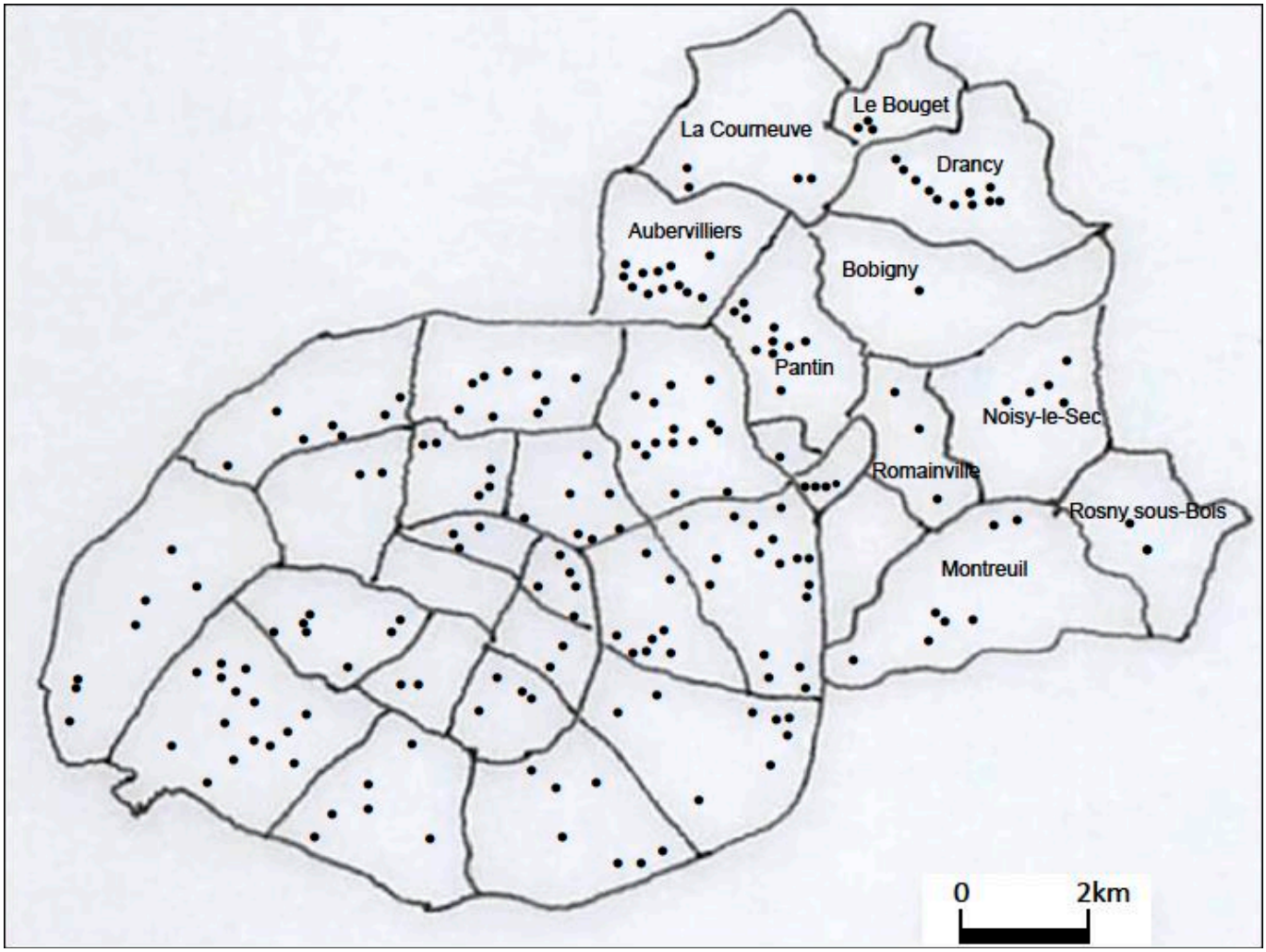

図2　調査対象店舗の立地（左下パリ市・図3参照　右上の自治体名を表記している地区がセーヌ・サン・ドニ県）

2. 居住者用店舗

当該街区は，オスマンによる都市計画街路に面し，5 本の街路が交差する。したがい 5 つの角が形成され，その 5 つの角すべてに店舗が立地する。カフェの 2 店（北東角，南東角），ブランジェエリー・パティスリー（南西角），薬局（北西角），クリーニング（南南角）の合計 5 店舗であり，カフェとブランジェリーというフランスの典型的な景観をみせている。そこで，それぞれの店主の出身地を見ていきたい。カフェは，ひとつは中国出身者であり，もうひとつはアルジェリア出身者である。ブランジェリー・パティスリーはチュニジア出身者となっており，典型的な景観を移民が支えていることがわかる。ただこれらは，いずれもここ数年の間に店主が変化しているようだが，店舗の業種はいずれも引き継がれていることがわかる。

同じブランジェリー・パティスリーには，この交差点から南西の次の角，または北側の次の角にも立地する。その前者はチュニジア出身者であり，後者については次章で紹介する（ただし，フランスでは出身国と国籍は必ずしも同じでないことも多い。フランス共和国は，移民，亡命者，難民の実に多くにフランス国籍を渡している。したがい，本論であげる様々な国の出身者も，フランス国籍ともなっていることは多い）。

3. 宗教と暦

店主の特性は暦において自ずと明らかとなる。もともとユダヤ教，キリスト教，イスラム教では，それぞれ安息日や祭日が異なり，いまでもその習慣から休日もそれぞれとなる。この多様性によって，景観も多様となり，混合であることは，また街区全体が同時に店を閉めるという景観とは違ったものとなる。そのなかで金曜日の午後と土曜日に閉店している店は，ユダヤ教の暦を使っている人々であることがわかる。前章の結びで挙げたブランジェリーもそうである。

さらに先に挙げた五差路の 5 つの角のなかで，南西角の店舗に隣接する精肉店，南南角の店舗に隣接する宅配寿司，北東角の店舗に隣接するレストランはいずれも同様のものとなっている。さらに五差路の交差点から東側方向には，数店の同様のレストランや店舗が連続して立地する。他国の出身者の店舗が並ぶ例は少ないなかで，ここだけは混合とは言い難い。

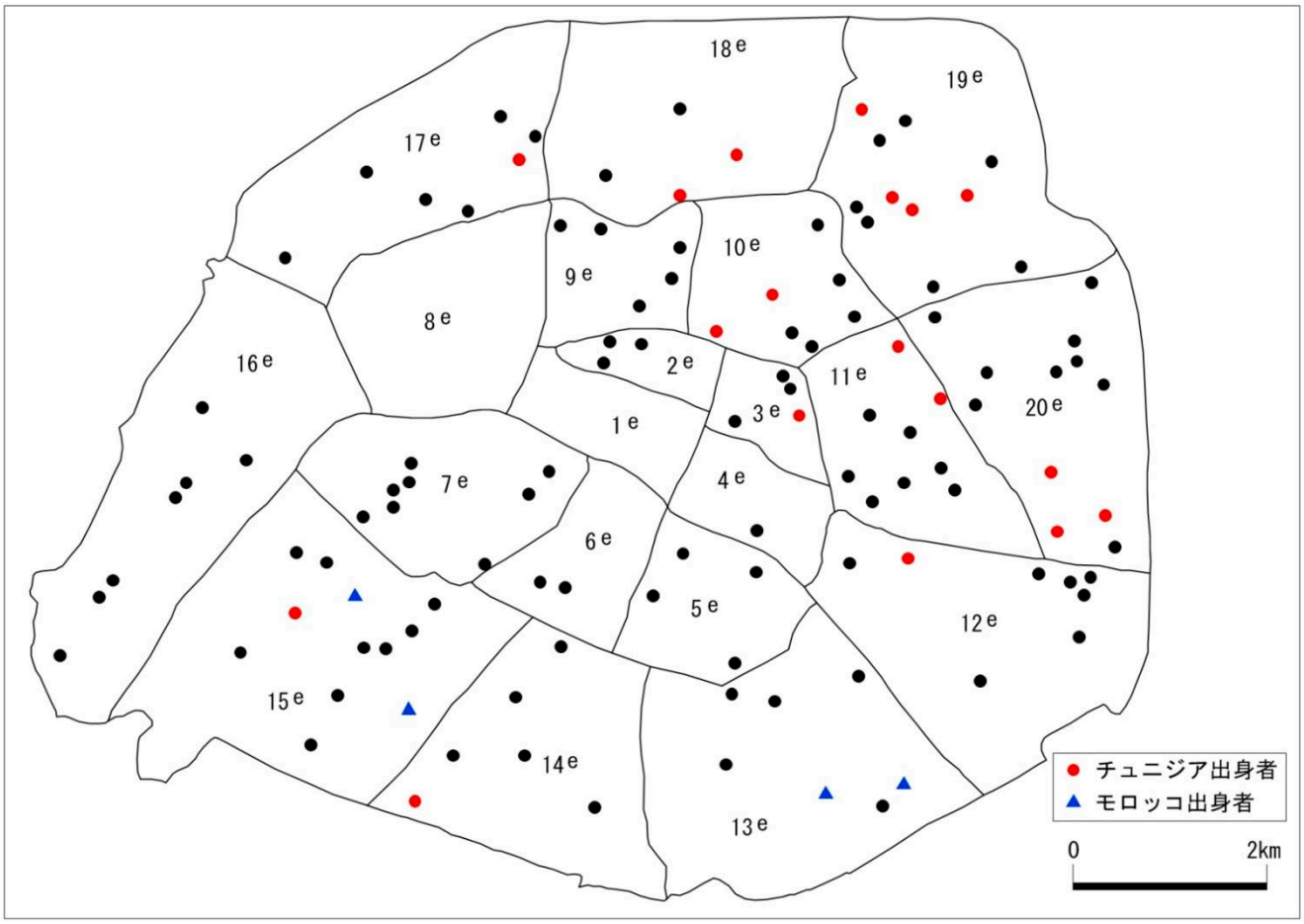

図3　パリ市内の1区（1e）から20区(2e)における店舗特性

4. 宗教と習慣

次に宗教的行事との関係を示す。自室からは，地上階のカフェ（以後，地上階カフェと記す）と対面のオスマン式建築の地上階のカフェ（以後，対面側カフェと記す）を直接的に定点観察できる。この対面側カフェ（店主アルジェリア出身）の定点観測中，夜間における利用者が急増し（20 名前後），閉店時間が大幅に遅れる時期があった。イスラム教のラマダンが要因であった。2013 年は 7 月 10 日から 8 月 7 日の間，日出から日没まで料理と飲料を断つもので，21 時を過ぎる日没後，ラマダン中の特別な料理を家庭で済ませた後に，人々はカフェに集まり 0 時をこえるまでコーヒーで会話を行う習慣からくるものだった。通常は 21 時に閉店するが，ラマダン中は変更していた。当該街区のアルジェリア出身者だけでなく，チュニジア出身者も集まる。夕刻以降，コーヒーをさほどとらない多くのフランス出身者とは対照的である。同建築内の別の場所でラマダン中の料理について継続して調査したが，毎日異なる料理が作られ，家族だけでなく，隣人たちにも振る舞われていた。集まる人々へのインタビューではほとんどは単身者赴任者であることが分かった。ここで取り上げたカフェはイスラム暦を使う利用者も多い店であるが，他方で周辺のユダヤ暦を使う人々の利用も見られる。ユダヤ歴を使う彼らは料理については規則があり，前章の結びに挙げたような専用のレストランを利用するが，コーヒーは，こうしたカフェを利用している例が少なからず見られた。

5. 街区の特性

このような夏季開店している対面側カフェ（店主：アルジェリア出身）は，8 月にバカンスとして閉店する地上階カフェ（店主：中国出身）とは対照的である。地上階カフェの定点観察によって定期的利用者の特性は，毎日利用しているのはすべて近隣に住むフランス出身の音楽，ファッション関係者であった。この地上階カフェの店主は，日常的に対面側カフェを利用している。この五差路に立地する両カフェとブランジェリー（製パン店兼菓子店）の，この三店は，頻繁に人的交流が行われている（地上階カフェの利用するパン類は，対面するブランジェリーのもの）。

次に，この街区近隣において，生活利用をしていくなかでインタビューを行った店舗の特性を記しておく。フランス国内出身者と答えが得られた店舗は，美容院（パリ市出身），花（ノルマンディ地方出身）の二店であった。この街区近隣においては，フランス以外の出身者による店舗の方が多くなる。

以下に挙げると，野菜果物店（モロッコ出身），食料品店（アリジェリア出身），食料品店（モロッコ出身），クリーニング(中国出身)，お直し(ベトナム出身)，靴修理（カンボジ

ア出身），雑貨品（トルコ出身），食堂（レバノン出身），ピザ（イタリア出身），寿司（中国出身），となっていた。従事する人々も店主と同じ地方出身者が見られたが，彼らは同街区周辺での居住ではなく，パリ市外の郊外から通勤しているという答えが少なくなかった。

6. ブランジェリーの特性

最後に，ブランジェリーの特性について見てみたい。先の当該街区においては，チュニジア出身者とユダヤによる店が特徴的に見られた。そこで，パリ市内を見てみたい。図 3 には，4 月から 8 月の 5 か月間におけるデーターであるが，この調査は，生活行動のなかで，ランダムに利用した店舗であり，この割合は，実際の全体像とは必ずしも一致しないであろうが，あくまでも生活利用における実態としては，パリ市内では 15%の店でチュニジア出身者，そして 3%がモロッコ出身者となっていた。

ただ郊外のセーヌ・サン・ドニ県になるとこの割合は地区によってかなり変わってくる。例えばドランシー市内では，半数以上のブランジェリーがモロッコ出身者となる。このように地区によってモロッコ出身者が多くなっているところもある。

一方で，チュニジア，モロッコとともに移民が多いアルジェリアの出身者によるブランジェリーは，365 店舗の調査のなかでは 1 軒のみであった。ただ菓子専門店になると，逆にアルジェリア出身者の割合は高くなる。したがって，出身地と店舗の特性は強く関係していると思われる。

7. むすび（パブリックスペースとしての居住用店舗）

以上のように店舗を媒介とした移民の特性を 2 種の分析で見てきたが，図 3 のようにマクロでは移民店主が目立つ地区とそうでない所が見られたが，つぶさに街角や街区レベルでみると様々な出身地の人々による混合が見られる。

研究対象とした当該街区は，パリ市内北側としたが，本論はあくまでもこの街区の特性であり，パリ市内には多様な街区が存在する。ただこの街区では，オスマン式建築の居住者，また近隣の社会住宅においても，様々な国の出身者が居住し，他方で様々な宗教と習慣の影響がみられるが，出身地が同一である人々でかたまっているというよりも，むしろかなり多様な人々のコミュニケーションがとられているように感じられる。こうした多様性が，さらなる移民をひきつけ，同時にむしろ移民自身が，もともとのフランス共和国の理念を強く意識しているように思われる一面があることが感じられた。多様性がもたらす混合によって，様々な人々に関心を向けあうような意識が醸成されていくのだろうか。

さらにこうした多様性をもつカルティエへ居住選択していくパリ出身者の増加も顕著であり，このことでさらなる多様性を成していくのだろう。しかし，同時にジェントリフィケーションも危惧される。

社会的混合（Mixité sociale）とは，主に社会住宅において用いられる言葉であり，各自治体が一定の割合の社会住宅を建設する目的が強くかかげられている。社会住宅の内部において多様な所得の人々が混合して生活していく方策がとられている。本論ではこの用語について出身地などを含めた広義に考えてきた。そして今後は社会的混合を社会住宅レベルだけでなく，街区レベルで持続していけるような方策を考えていきたい。次稿では，さらに社会的混合の役割や効果について論ずることにする。本論はそのための基礎的研究としている。

前章で見たようにパリの典型的な景観を形成しているブランジェリーは少なからず他国出身者の役割が高いことがわかるが，同じくその一翼を担うカフェについても 4 章の調査で見たようにアルジェリア出身者は多い。その両者の共通性を見てみると，利用者の多くが，カウンターカフェは約 1 ユーロ，バゲット（パン）も約 1 ユーロでコミュニケーションを行っている。都市の要所にこうした利用しやすい空間が用意されていることは，重要なことであろう。ここはパブリックスペースの役割も果たしているといえるであろう。そのパブリックスペースが，都市の角地に継承され，さらなる景観やコミュニティを醸成していることは着目しなければならない。こうした拠点が社会的混合に少なからず寄与していくのではないだろうか。

調査年度，パリの恒例行事となっているバゲットコンクール（Le meilleure baguette de Paris）の受賞者が発表され，1 位はチュニジア出身者だった。受賞者は，一年間エリゼ宮（大統領官邸）にバゲットと納めるというものであるが，このようにフランスの伝統文化に関して移民の果たす役割が重要となっていることも明らかである。

図4　オスマン式建築角の店舗特性（左側カフェ・右ブランジェリ）

謝辞

本論は，武庫川学院の 2013 年度在外研究の機会をいただき，フランス人文科学研究所の受入教授として研究させていただいた一部である。武庫川学院および受け入れていただいたジャーヌ・コビー先生，研修をすすめていただいた中村良夫先生（東京工業大学名誉教授）に謝意を表します。